

平成29年度 第1回能美市総合教育会議 議事録

I 日 時 平成30年2月2日（金）
開会 午後1時28分 閉会 午後3時5分

II 場 所 能美市役所 3階 委員会室

III 出席者

【構成員】

市 長	井出 敏朗
教育長	谷口 徹
教育長職務代理	南 俊博
教育委員	亀田 美穂
教育委員	畑中 美千代

【事務局】

総務部長、総務部次長、総務課主事

【教育委員会事務局】

管理局長、教育総務課長、学校教育課長、スポーツ振興課長
生涯学習課長、教育総務課参事

【司会進行】

総務部次長

【傍聴人】

2名

IV 内容

- 1 開会
- 2 市長挨拶

(市長)

教育委員の皆様におかれましては、常日頃、能美市の教育行政にご協力、そしてご支援をいただきまして本当にありがとうございます。本日

の会議の主題は、能美市の教育大綱の見直し、ということであります。教育大綱にどのような内容を盛り込んでいくか、ということですが、教育力を向上させるという観点においては、学力を向上させるなど、いろいろなことがあると思いますが、私は、能美市の子どもたちが「元気に楽しく学校生活を送り、毎日学校に通ってもらえる」、そんな学校づくりが一番大切だと思っております。そしてそれは、学校や教育委員会、そして我々行政だけでやれることではなく、やはり地域の皆さん、それから家庭、そして学校が三位一体となって取り組んでいくということが一番大切ではないかと思っております。それぞれの分野の中で、いかにして子どもたちが毎日楽しく学校に行ってもらえるように取り組んでいくかを教育大綱の中に盛り込んでいきたい、そんな思いであります。

そして、もうひとつ大事な要素としては、「ふるさと愛の醸成」ということがあろうかと思えます。能美市の子どもたちがグローバルに活躍することを願う一方で、「ふるさと」というものを大事に思い、将来Uターンをしてくる、あるいは、ずっと能美市で学び、働きつづけてもらえる、そんな子をたくさん育てていくことも大切だと思えます。そして、それらを下支えしていくためには、学校の先生方の働き方改革も考えていかななくてはならないと思えます。先生方が大変お忙しいということは、皆様方もご承知のとおりであります。そのような中で、先生自身が健康であるとともに、生徒たちと向き合う時間をどう確保していくかということもこの教育大綱の中に入れていきたいと思えます。加えて、私どもの教育委員会では、学校教育のほかに、生涯学習、文化振興、スポーツ振興もつかさどっておりますので、それらについてもこの教育大綱に入れていけたら、との思いもあります。

本日は限られた時間でございます。いろいろと申し上げましたが、子どもたちが元気で、そして明るく学校に行きたくなるような、そんな教育大綱になれば、ということをお願い申し上げまして、冒頭のごあいさつとさせていただきます。よろしく願いいたします。以上でございます。

3 協議事項

平成29年度 能美市教育大綱（案）について

（事務局）

配布した資料（教育大綱（案））の概要について、教育委員会事務局の教育総務課長が説明し、構成員に意見を求めた。

（南教育長代理）

全体を見ますと、大綱にはいろいろなことが入っていると思います。様々な学校を見させていただいた中の現状として、1つは、芸術分野が学校教育の中で減ってきているので、それを補うために地域の人力を借りることが大事だと思います。やはり、美的な感覚というのは小さいころから磨かれるものでありますし、その分野のバックアップをする形も必要だと思います。

2つ目に、コミュニティスクールができましたので、地域にある「地域力」もいろいろと活用できればいいのではないかと思います。そのひとつとして、教育委員会会議でもお話ししたのですが、以前幼稚園児との交流があり、その中で我々も元気をもらえたので、小学校でも同様の交流の場を設けるのがよいと思います。おそらく1、2年生の小さいときには、幼稚園児と同じようになるかと思いますが、高学年になりますと、例えば、木工クラブ、ノット、水鉄砲づくりなど、地元で根ざした技術を伝える交流の場があればいいのではないのでしょうか。そうしますと、今度はいかにして人数を集めるかということも問題になってきますが。

こういったものは地域から発生していくものだと思いますが、現状のコミュニティスクールでは、学校から提案したものがなされるというものが多くと思いますので、なんとか、地域から「こういうものはどうか」という提案があればよいと思います。九谷焼など、すでにやっているものもあるかと思いますが、そのようなものをもっと掘り起こしてしていくのはいかがでしょうか。小学校5、6年生や中学生では塾や習い事で忙しいので難しいところもあると思いますが、小さいうちにいろいろな体験をさせて、

作ったものを見返してもらおう、というようなことを考えていくのもひとつの有力な方法ではないかと思います。

(亀田委員)

南委員がおっしゃったように、やはり学校からと言いましてもなかなかできないこともありますので、地域から発信してもらいたい、地域の方も一緒に、という気持ちはあります。

直近の話ですが、先日の大雪では、みんな慌てて、大人も子どももどうしていいかわからなかったという状態だったと思いますけれども、なんとか一日を暮らすことができました。私は子どもの見守りをしており、たまに、まだたくさん雪がある月曜日に子どもたちの様子を見せてもらいました。親からも「歩道ではなく車道を歩くので危ない」との意見がたくさん出ておりました。それなら、何かしなければいけないのですが、「危ない」、「誰が除雪などをしてくれるんだ」、との苦情ばかりでした。子どもから、またその親、あるいはPTAから、何か一言地域の人をお願いできなかったものかなと思いました。

昔は大雪が当たり前で、除雪車は通らないものの毎日の生活は過ごしていました。そのときの子どもたちの生活というのは、上級生が下級生をかばい、大雪のときは、上級生が機転を利かせて、スコップなどの除雪するものを家から持ってきて、学校まで行った覚えがあります。下級生は「お兄ちゃん、お姉ちゃんについていけばいいんだ」と上級生を頼りにしましたし、またそれを見習っていった、という時代がありました。

月曜日の帰りも、子どもたちは雪の積もった危ない状態の歩道でしたが、遊びながら歩いて帰ってきていました。元気な子どもたちばかりで、私は「よく頑張ってきたね」とハイタッチして迎えていました。いつもはハイタッチを逃げる子も手を上げて、「頑張ってきた」と寄ってきてくれて、私も「もう少しだから頑張る」と声をかけていたのですが、あの力があるのならば、なぜ土日があったのに、PTAと子どもたち、上級生だけでもいいので、自分たちの周りの歩道の雪かきをやろう、と声をかけなかったのかなと思いました。そうすれば地域の人も手伝いにでてくれたのではな

いかなど。また、そうすることで地域のことを思う気持ち、ふるさと愛の気持ちもでてくると思いますし、子どもたちも達成感が得られるのではないかと思います。なんでもやってくれるという過保護の時代に、そういうことを気づかせてやるというのは、ひとつ大事なことでなかったかなと感じた一週間でした。これをチャンスと捉え、土日に親子で雪かきをやればよかったかなど。その際に地域の人もお願ひします、と言えは出てくれたとも思います。このようにピンチをチャンスと考えられたらよかったなあと思います。

教育の根本的なものは、市長が言われたとおり、元気で楽しく、毎日学校に通ってこられる、そんな子どもたちを育てることだと思います。そこには働き方改革もありますが、先生方も自分自身が楽しく授業をしているか、わくわくドキドキしながら授業をしているか、が大切だと思います。疲れ果てて授業をしていると、子どもたちは敏感に感じます。しんどいこともあるでしょうが、先生自身が楽しんで授業ができれば、子どもたちも変わっていくと思います。少子化と言ひながら、不登校の子どもたちが増えている実態もありますし、親が変われば変わっていくこともあるのではないかと最近感じました。

(畑中委員)

私が教育委員になってからでも、子どもたちの周りの環境が、私たちの子どもころとは大きく違ってきていると感じています。根本的なこと、例えば、相手を思いやる気持ちや命を大事にする気持ちなどは、どんなにまわりが変わろうとも必要なことなので、そういうことは大事にすべきだといつも思っています。そして、市長が言われたように、学校も地域も笑顔があるところにはもう一回戻ってきたいという気持ちになれるので、笑顔を大切にすることを打ち出す大綱になればいいなと思います。

また、「人と人との絆」というものも強く感じます。亀田委員が言われたとおり、大雪の際、どうして声を掛けられなかったのか、みんなでやろうという一言がでなかったのか。こういったことは、日頃、隣近所や隣町でコミュニケーションをとれている大人だと、誰かが訴えることができたの

だと思えますが、最近子どもたちが車で送り迎えをしてもらうなど、子ども同士も親同士も話し合いがなくなってきました。これからもっと大事になるのは、地域と地域のつながり、人と人とのつながりだと思えます。

また、昨年からですが、コミュニティスクールにより学校と地域のつながりもできてきました。どのような形でもいいので、そのきっかけをどんどん作っていければいいなと思えます。それがどんなきっかけかはまだわかりませんが。ただ、大人同士のコミュニケーションがうまくとれていない、だからと言って人のことを思っていないわけではなく、能美市のことも思っていると思えますので、大綱に人とのつながりを最初に打ち出しているのはすごくいいことだと思えます。

さらに、能美市のPRポスターやビデオなどがありますが、ビデオを見ていると思わず笑ってしまい、幸せな気持ちになります。その子どもの様子や思いはほかの子どももみんな持っているものなので、それを引き出して、学校に行くと楽しいな、という気持ちになってくれたらすごくいい能美市になると思えます。

学力の面でも、社会に出た時にこれだけは知っていないとならないというところまで達するようにしてほしいですし、そこに達していない人がいないような教育であれば嬉しく思えます。そういったことも大事にしてほしいと思えます。

(亀田委員)

少し補足します。アクティブラーニング、つまり主体的な対話、深い学び、ということが今強く言われており、そういうことを子どもたちに教えることはコミュニケーション能力が身につくのでとてもよいと思えます。

ふと感じたことですが、一人ひとりの「どう教育してほしいか」ということに関して、いろいろな人がいることをよく理解し、一辺倒な教え方ではなく、一人ひとりの個性を大事にした教え方が必要だと思えます。また、いろいろなことができる多様性に富んだ社会を子どもたちに目指してほしいと思えます。先ほど南委員も言われましたように、芸術的な分野などいろいろなことに関して、地域力を発揮できるような社会を目指してほしい

などと思います。

今の社会は、口をつむぐような風潮があるように感じます。子どもたちの中にも目立たないように、という風潮があるような気がします。みんなそれぞれの個性があることを認め合えるような社会になれば、学校も活気づいて楽しくなるのではないかと思います。

(南教育長代理)

情報関係の仕事をしておりますので、その点から話をしますと、ネット問題などもあります。そのこともありまして、確かにいろいろな人とのコミュニケーションが昔より足りなくなっているように感じます。ネットとどのように接するか、倫理といいますか、そういったものをどうにか確立できないかと思っています。

小さい子に全て言っても分からない部分もありますし、年齢に応じて考えて修正していかなければならないと思います。また、地域の人と直につきあうことが大事であるとともに、その際のマナーなども重視した体系にしていければいいかと思っています。特に情報関係に携わっていた身ですので、逆にそこに目を向けてこなかったのも悪いのかなとも思い反省もしています。

(市長)

例えば、ここに項目を挙げさせていただいておりますが、こんなキーワードや項目があればよいというものがあれば、ご提案いただければと思いますが、いかがでしょうか。

(南教育長代理)

私も大学でいろいろなクラブ活動を見てきまして、最後に顧問になったのが硬式野球でした。そこには100人くらいの部員がいて、それだけいますと、どうしてもそれに向かない子や一定のレベルに達しない子が出てきてしまう。ただ、そのような中でもちゃんと生きていく場所を見つけるような指導も必要だと思います。いろいろなサークルやクラブがある中で、

そのあたりの考え方をどのくらいの指導者が持っているでしょうか。けがなどでプレーができなくなり、指導者を替えて別の道を探すなど、必ずしも皆がレギュラーになれるわけではないので、そのようなことも考慮した指導法についても、もう少し方向付けをしてはどうかと以前より思っていますが、なかなか正解はないものですし、各指導者の采配によるところもあります。強制するものでもないので、難しく思っているところです。

なににせよ、能美市はどういう方針で指導を行うのか、また、いろいろな形で「居場所を作る」という方向で考えてみることも大切かと思えます。

(亀田委員)

居場所に関しまして、大綱の中に「たくましく社会を生き抜いていく力」や「安心して過ごせる学校環境づくり」などが書いてありますが、どこかでよいので、「親や教師が協力して子どもを助ける」という文言があるとホッとしますかと思えます。家庭と学校が協力して子どもを助けることで、子どもの居場所もあるのかなと感じます。上から命令調に教えるのではなく、子どもの力を引き出すことが大切だと思えます。

私が昔から好きな言葉に「心の畑を耕す」という言葉があります。鋤かすといいますが、石や雑草を取り除いてふかふかな土にしてから、植物を種から植えるというイメージを子供たちにも体験させてあげたいと思えます。それも先生や親が過保護に取り除いてあげるのではなく、厳しいかもしれませんが、自分自身で取り除く力をつける、自分自身で畑を耕して、自分で種をまいて成長していくといえればわかりやすいでしょうか。ただ、今の世の中、除草剤をまいたり、ただ草を刈って種をまいたりしてもなかなか成長しません。だからこそ、「鋤かす」、つまり親や先生が助ける、それも親や先生が自らルールを引いてさあどうぞ、とするのではなく、こうしたらいいよ、とアドバイスをする程度のものであれば、子どもにも未来があるのではないかと南委員の話聞いて思いました。

(南教育長代理)

私はプログラミングをしております、主にシステムを作っていました

が、その過程で失敗はすごく大切だと感じています。先ほどの「畑をたがやす」ではないですが、エラーをしながらやっていく、そして、それに対して寛容であることが大切です。そうでないと優れた人材というのはできないと思います。何回も同じ失敗をするのは怒られますが、「まずはやってみる」ということが重要だと思います。失敗が成長につながる、そんなことをかねがね考えておりました。

(畑中委員)

失敗にめげない子を育てることも大切です。親が子を大事に思い、「失敗したらかわいそう」、「できなかったときの悲しい顔を見たくない」と、先走って助けているのかもしれませんが。不登校の原因をみると、いじめが原因で学校へ行けないのかと思いましたが、それ以外の原因で学校へ行けない子が多いのが現状なのです。例えば、宿題ができない、していかなかったら先生に怒られる、怒られるのが嫌だから学校へ行きたくない、と判断して学校に行かない子もいると聞きます。昔は、宿題をしていなかったら先生に怒られるというのが当たり前だったのに、今は、自分で自分を甘やかせてしまっている子もいるそうです。だからこそ、たくましい子、めげない子ということがすごく重要だと感じています。社会に出るといろいろなことで挫折して、例えば、仕事にしても、私には向いていないと職を変えていく。そうすると、どんどん甘えが優先されるようになります。部活動などは自分を鍛えていくのに必要なことですし、親もそういう気持ちを持つことが必要だと思います。昔は、先生に怒られると、なぜ怒られたのかとまた子どもが親に怒られるくらいでした。そういうことが残っていたらいいとも思うし、それが古臭いのかなとも思ったりしているのですが。

(南教育長代理)

中学生になってなんらかのスポーツやクラブ活動をやっているのは能美市の子どもたちの成長にとっても役立っていると思いますので、これ自体は重要なことだと思います。だからこそ、もう少しそういう方面に対して、多様性といいますか、フォローをしてほしいとも思います。指導者も大変

になるので働き方改革も考えていかなければならないですが。

(畑中委員)

例えば、地域の行事があったときのことです。今習い事をしている子やスポーツクラブに通っている子がたくさんいますが、地域の行事があっても、子どもたちは習い事やスポーツクラブへ行き、親も子どもの送迎に行っているのです。その行事には関わらないのです。運動会にしても、試合ならともかく、練習のときぐらいは、スポーツをしている子も参加できるようになればいいと思います。今、働き方改革で先生方がクラブなどで指導者を別に雇うことになれば、雇われた人はクラブの指導に一生懸命になってしまい、地域の行事に参加する、コミュニティを大切にする、ということからずれていってしまうのではないかと危惧しています。そういったことを考えると、矛盾もあるなと思ってしまいます。難しいとことですが、市長はどう思われますか。

(市長)

実は本日の会議にあたり、市内の小中学校の校長先生数人とお話しさせていただきました。その中で、畑中委員も言われますように、ジュニアスポーツと学校とでどう連携していこうかと悩んでいる校長先生もいました。例えば、ある学校では、月曜日になるとジュニアスポーツで頑張っている子がなかなか授業に集中できないこともあるという話も聞きまして、ジュニアスポーツの監督や先生方と学校が連携する、相談や協議する場があってもいいのではないかと考えています。

私の息子も少年野球をずっとやっております。その際、監督が目指す方向が常に勝つことでした。保護者も試合に勝つことに喜びを見出すので、監督も「いかにして勝つか」ということが一番の目標になってしまっています。勝つことだけでなく、人間形成の場としてお互いのコミュニケーションをとること、地域の行事に出ることなどが、その一方で必要になるということを監督やジュニアスポーツに入っている子の親たちも認識し、学校や教育委員会と話し合う中で、どういう方向にするのがよいのかを協議

する場が必要ではないかという気がしています。

また、「家庭教育の充実」を具体的にどう進めていくかについても悩んでいます。教育に熱心な親とそうでない親の差がひらいている可能性があり、別の言い方をすれば、子どもに愛情を注いであげられない親が多いとも言えるかもしれません。愛情を注ぐ時期は何歳までか、というと小学校高学年だと遅い、もっと言うと小学校に上がる前から愛情を注ぐ時間や度合を深めたらいいのではないかという先生もおり、小学校と保育園が連携する場所があってもよいのではないかと思っています。今は、小学校へ入学する際、情報交換の場はあるが、お互いにどう一体となって教育するかを協議する場がそれほどありません。どう愛情を注ぐか、どう子どもと接していくかについて、保育園と小学校が連携する場所があってもよいのではないかと考えています。

続きまして、働き方改革という観点で、ご提言やご意見があればお聞きしたいと思います。

(南教育長代理)

教員を長くしておりましたので、先生方の気持ちはよくわかります。先ほどの話にもありましたように、自分が楽しく授業をしていると、時間も忘れても平気なんですよね。

また、時間を与えられると、似たようなことを別の形でやってしまう感じがします。深く考えると時間がかかってしまい、解決が難しいとも思っています。

(亀田委員)

南委員の言われたように、先生が楽しかったらよいと思います。学校ではなく家であっても、楽しいとさらに勉強され、子どもに反映される、先生が勉強したことは授業中どんどん子どもに伝わると思います。表面的な授業をされても子どもには響かず、勉強も楽しくなくなる気がします。やはりパワーのある先生がほしいと思います。

また、事務的なことを簡素化し、子どもの学力向上のための勉強を先生

自身がする時間をもっと設けられるようになれば、少しは勉強にも集中できるのではないかと考えています。

(畑中委員)

私は会社員をしていたので、働き方改革というと会社員と先生とは違うのではないかと思いがちですが、先生も会社員も同じ人間ですし、体を壊したら何にもならないので、やはり働き方改革は必要だと思います。

例えば、ベテランの先生とそうでない先生は、作業時間の差ができてしまいます。しかし、時間を制限したところで、残業をしてでもベテランの先生にならおうと思う先生もいれば、残業をしてはいけないのであれば、もういいやと思う先生もいるでしょう。そういうことにはならないようにしてほしいと思います。そして、校長先生をはじめ管理職の方には、先生一人ひとりを見ていただいて、先生のやる気を失わさないような指導をしてもらえたら、子どもに影響が出ないと思っています。タイムカードを押して、さようなら、と退席するのはさびしく感じますが、これも時代の流れでしょうか。何かやりようがあるのではと思います。民間企業では利益に関係するので、「定時で帰れ」と言うものの、仕事量が多いという矛盾があり、その矛盾も理解したうえで仕事をしていたこともありました。だんだん体力や気力が落ちてきたら、もういいやとなってしまうこともあります。しかし、先生方にはそうなってほしくないのです。校長先生や教頭先生がしっかりと見て、指導をしていただけたら良いと思います。

(南教育長代理)

例えば、小テストの○×問題は他の人に任せても良いとは感じています。ただ、小テストの丸つけも生徒を知るための術でもあるので、なかなか簡単にはいかないと考えています。

(亀田委員)

子どもの作文など、たんに丸付けをするのではなく、先生が何か一言書いてくれると、子どもにとってはすごく嬉しいものです。一言書くのはき

っと先生も大変だと思いますが、先生でなくてはできないことでもあるので、時間で区切るといのはなかなか難しいですね。

(畑中委員)

他県にいる孫の話ですが、おそらくここの学校でもしている先生もいるかもしれません。例えば、宿題の丸付けを親がするのですが、間違った問題に対して、子どもは親に「もう一回してくるから丸をつけて」と言い、丸のついた宿題を学校へ持っていくことがあります。私はそれでいいと思います。宿題の丸つけなどを先生の仕事の中から省く、言い方を変えれば、親と子がコミュニケーションをとれる場を設けるというやり方は、とても面白いなと見ていて思いました。そういう機会があると、親は子どものわからないことがわかりますし、丸付けをしていない親がいれば、先生はその親を把握できます。

(市長)

私から続けてとなりますが、国際交流に関しましても、ご提案、ご意見を頂戴できればと思います。現在、能美市では寺井中学校と根上中学校が韓国の中学校と姉妹交流をしておりますし、年に1回、シェレホフと交流もしております。また、J A I S T が能美市にあることも踏まえ、国際交流をどう進めていくかもこの大綱に入れていきたいと思い、大綱（案）にそれぞれの方針、具体的な施策を記載しております。その中で、この点をもっと考えていっては、もっと強化していっては、というのがありましたらお願いします。

(南教育長代理)

異文化交流はとても大切だと思います。何らかの形で、できるだけ多くの児童生徒に体験させてあげたいと思います。文化が違うということは気づかされることも多いです。いつも慣れ親しんだ常識を打ち破ろうというのが、重要なのではないかと思います。

(亀田委員)

様々な国に出かけて行き、外から日本を見ることが、これからとても大切なことだと思います。最近の内気な子も多いですし、外に出てはじめて気付くこともたくさんあると思います。使節団の交流の中で、向こうの子どもたちは、日本の子どもたちが伝統文化を身に付けているのが当たり前と思いき、文化に関するいろいろなことを質問しますが、今の日本の子どもたちは何もわからない、帰ってから勉強しなければ、と気付く子も多いのではないのでしょうか。そういった場面では、改めて日本の伝統文化を理解する機会にもなると思うので、どんどん外に出ていけたらいいなと思いますし、その一方で、外からの子どもたちも受け入れて、新しい異文化に触れることもチャンスだと思います。

(畑中委員)

これからの時代、様々な国の人と接する機会が多くなるので、国際交流は必要だと思います。例えば、学校の英語教育にしても、JAISTにいる外国人との交流をする場があることは、能美市だからこそだと思うので、そういったことをどんどん生かしていくとよいと思います。また、私の住む町会では、大晦日に餅つき大会があり、毎年JAISTに通う外国人も参加し楽しまれていきますが、彼らは思いもよらないところに興味を持つのです。前は、お雑煮の餅を丸める作業をしたいと言われました。彼らは見るだけではなく、積極的にその作業をやらせて下さいと言うのです。「うまくいかないかもしれないですよ」と言っても、「でも1回やらせてください」と。日本の子どもたちも積極的に行動できるようになるには、小さいころからいろいろなところへ行き、外国の人と付き合うことが大事なのだと思います。

(南教育長代理)

外国に行くにはやはり言葉の壁がありますね。ただ、行く機会がないと難しいです。最低限の、何にもないところで生活するという体験ができるのが、例えば登山です。自動販売機もない、コンビニもないといったとこ

ろで、どうやって生きられるかが身につくといいですか、そういうことに気付かせる機会があればよいと思います。

ネットではできない体験ですし、実際に歩いてみてどうするかということが大切だと思います。

(市長)

大きな項目を2つ残しておきまして、スポーツ振興について、大綱にはキーワードが4つありまして、1つは競技力を向上させる、2つ目は余暇として楽しむ、3つ目は健康づくり、最後にスポーツをやっているのを見る、親しむ、ということです。私どもの教育委員会には、スポーツ振興課があり、これらのことを一生懸命やろうとしています。このスポーツ振興ということに関して何かあればご意見を頂戴したいと思います。

(南教育長代理)

今まで学生を見てきて、中にはスポーツしか知らない子、スポーツをしているからほかに興味がわかない子がいました。そういった子たちは、スポーツ以外のことを考えてこなかったもので、社会に出てから苦労すると思います。ある程度の学力は持っている、生活知識がある、という最低限のことが、彼らの将来のためにもなると強く思いながら指導していました。

(亀田委員)

能力がある子は伸ばしてあげたいし、その子自身も伸びていきたいと思うでしょう。それは大切なことです。上からの押し付けで嫌々やっていたら、思考力が停止して、言われたことだけをやる、そんな人間になります。そうなるとスポーツも嫌いになっていくかもしれません。しかし、将来的には、健康のためにスポーツをやきましょう、体を動かしましょう、と言われていきます。スポーツは、コミュニケーションの場としても、汗を流すこととしても楽しいものです。みんな一緒くたにというのはなかなか難しいですが、コーチのやり方次第だと思います。厳しい指導をやれば、能力のある子はついてきますが、できない子はできないですし、できない子

はラクしたい、休みたいと思ってしまうがちです。楽しんでやりたい子と、能力を伸ばしたい子がいます。一緒のことをやれというのは難しいので、区別した指導ができればよいと思います。

(畑中委員)

小学校や中学校でのクラブ活動は、友達作りが大きいと思います。私自身、クラブ活動でチームワークや人と人との、友達同士の関わりあいを学びましたので、そういうスポーツのやり方もとても良かったと思っています。大人になってからも、何かしなきゃなと思い、地域の人とクラブを作り、いろいろな人と知り合うことができたので良かったと思います。今は大人のクラブやサークルが減っている気がしています。私は大人になってからのクラブ活動で知り合った人と今でも付き合いがありますので、そういう場所があるといいと思っています。また、今の年齢では、体力づくりとして歩くことが必要になりました。健康のためのスポーツとしても、一生懸命スポーツは必要だと思います。ただ、先ほどもありましたが、スポーツクラブと地域との兼ね合いにひっかかりを感じることもありますので、そこが改善できれば嬉しく思います。

(亀田委員)

スポーツで挫折した子も知っていますので、そこが心配です。未だに苦しんでいる子もいますので。熱心に取り組んだがゆえに潰されたとなるのはかわいそうですので、先生には指導力、あるいは教育力を身に付けてほしいと思います。

(南教育長代理)

高校まで続けてきて、燃え尽き症候群になる子もいます。能力は高いのに、もうこの競技はやりたくない。そういう実態もあります。

(市長)

現在、市役所のギャラリーでは、能美市ゆかりのスポーツ選手の展示を

行っており、そこには、大リーガー、新人王、世界記録保持者、銅メダリストなどがいます。本当に能美市にはすごい人がたくさんいます。一方で、挫折してスポーツをやりたくないという子もいて、スポーツ振興をどのように進めていくかということは大切な項目だと思います。

(亀田委員)

結局、誰に対しても同じように指導してはいけないということです。伸びる子にはより伸びるような指導をするなどしなければなりません。指導者も親も、その見極めが難しいのだと思います。

(南教育長代理)

そういった子には別のことを体験させてあげるということも大切なのだと思います。

(亀田委員)

やはり、勝つことだけに熱心なのもよくないのだと思います。

(市長)

最後に、「芸術と文化の振興」についてです。皆さんもお気づきかと思いますが、市内の公民館などでは、夜はほぼ予約が入っており、能美市内の様々な文化や芸術に携わる人が活動しています。昨年11月の1ヶ月間は、イベントを集めた月にしようと様々なことをしました。その中で、市内3中学校の吹奏楽部の子たちが演奏を披露してくれた日があったのですが、舞台上での演奏だけではなく、会場下りや演奏前のパフォーマンスなどにも各学校の特徴があり、それぞれに刺激を受けたのではないかと感じておりました。何より、発表の場をもっとたくさん作ったり、今までにない組み合わせで活動したりすることで、いろいろな刺激があると思います。その日は、全国1位の遊学館のバトントワリング部のチームも来ていたので、それも中学生には刺激になっていたと思います。そういったこともあり、この芸術文化の振興に力を入れていきたいと考えておりますので、この分

野に関して何かご意見はありますか。

(亀田委員)

発表の場があると、お互い刺激を受けますし、自主的に自分たちで考えて行動することも多くなりますのでよいと思います。

能美市は音楽だけでなく、いろいろな伝統や文化の活動が多岐にわたり活発に行われているので、それを発表する場があり、かつ、それらが子どもにも響けば相乗効果となります。また、全国1位の人などを呼ぶことで、今の自分たちとの差もわかり、刺激になります。そのようなことをすることで、子どもたちの学習にもつながっていくのではないのでしょうか。ただ、先生方は忙しくなってしまうですね。

(南教育長代理)

物事はやることで強くなります。また、切磋琢磨して上へ行けば、さらなる別の刺激があります。その機会があるというのはよいことだと思います。

ただ、教育的な面から言うと、特に小さいころから良いものを見る機会を設ける、また、良いものが当たり前の日常にある、そのような日常をつくるのが大切だと思います。音楽に関しても、絶対音感は4歳までで育たなくなることからも、小さいころから良いものに触れる機会があればいいと思います。

(亀田委員)

社会見学の利用もよいことだと思います。例えば、金沢での街歩きの際、美術館に必ず行き感想を述べるなど、石川県にはいろいろな文化がありますので、目に触れるという体験学習として、もっと利用していけばいいと思います。

(畑中委員)

能美市には九谷焼など、いろいろな伝統があり、それを子どもたちが学

ぶ機会を与え、よいものを見る力を養うことができるのは能美市ならではのすし、よいことだと思っております。また、習い事の発表の場は、実力をつけるのによい手段ですので、何回あっても良いと思います。発表の場に向かって一生懸命に取り組むことはすごくよいことなので、そういう場をたくさん作っていただけたら嬉しく思います。

また、文化協会に力を入れることになっていますが、絵など自分の趣味を持っている人の中には協会に入っていない人もいますので、そういう人たちの発表の場もあるといいなと思います。もしくは、文化協会に入る仕組みを伝えること、発信することも必要ではないかと思えます。

(亀田委員)

ふるさと意識もつけたいなと思えます。県外で「あなたはどこ出身ですか」と聞かれたら、有名な〇〇選手の出身地です、九谷焼の産地ですなどと言いますよね。そういう名前を出すと、みんな共感して、ほかのことも聞いてくれる、そこからまた能美の良さを発信できると思うのです。そのようなやりとりの中で、自分自身も知らなかったことを再確認し、そうやって地域のこと、ふるさとのことを考えたり、いいところを認めたりすることで、地元を意識が向いていくのではないかなと思えました。能美市には素晴らしい人が何人もいて、彼らのおかげで県外でも能美市が発信されていると思えます。

(教育長)

少し観点が異なるかもしれませんが、お話しさせていただきます。私は、新の教育制度になって、教育委員会と市長部局との連携が密になったのではないかという感想を持っています。この関係性を大切にしながらも、一方では市長とは異なる視点をしっかり持った教育行政の推進体として運営していく必要があると思っています。このように思うのは、市長のタウンミーティングに同行したことで、教育委員会として市民のニーズを把握する取り組みも必要ではないかと感じたからです。例えば、教育委員会会議を公開し市民の意見を聴く、あるいは市民の代表を交えた会にする、また、

教育委員一人ひとりが議題を持ち会議を開催するなど、市長の大綱に反映するようなものをたくさんしていけないかと考えておりました。教育委員の皆さんのお知恵を借りながら、政治をあずかる市長、教育の専門家としての教育委員会事務局や教育長、それぞれが違う視点を活かしていく必要があると考えています。それが、今後の大綱の充実や総合教育会議の充実にも絡んでくると思います。

また、市長には、これら教育施策の充実に深いご配慮をいただくきっかけになればとも思っております。

4 閉会挨拶

最後に谷口教育長が閉会の挨拶を行った。

(教育長)

本日は長時間にわたり、教育施策の充実に貴重なご意見をいただきありがとうございました。様々のご意見をお聞かせいただきました。

私が行政の立場の人間になってから、「共助」という言葉が耳に残っております。そこから、教育の共助はどういったものかと考えているのですが、コミュニティスクールがその起爆剤になるような気がしています。今はコミュニティスクールディレクターが中心となってサポーターを集め、自分のできることで学校に協力するという形が主です。そこには、財政的な制約もありますが、共助によってできることもたくさんあるかと思えます。持続可能な支え合いの仕組みということで、能美市版コミュニティスクールを広げていきたいと考えておりますので、ぜひ皆様のお知恵をお借りしたい、とのお願いをさせていただき、最後のあいさつに代えさせていただきます。本日はありがとうございました。

5 閉会

午後3時5分終了